

終戦を迎え、巖は三宮の現在地に戻りバラックを建てました。そんなおり 1946 年(昭和 21 年)7 月 1 日、保一が帰国をはたします。開戦と同時に拘束され各地を転々としたのち、イギリス軍のインドキャンプで無事終戦を迎えていたのです。故郷で再婚を勧められながらも保一の帰りを待っていたきぬも、神戸に戻ってきました。



保一と巖は、売れるもの、商売になるものを探します。まず、戦前から手掛けていたバッチです。当時進駐軍からの指導で大工場の社員と新制学校の生徒は身分証としてバッチをつけることになったため需要が増したのです。一方で軍人向けの勲章を作っていた職人が仕事を失っていたため、そんな職人と協力してバッチの製造販売が商売の柱となっていきました。

また、神戸にやってきた進駐軍に売れるものとしてクリスマスオーナメントに目を付けました。戦前から神戸の地場産業で、神戸のメーカーが内職で制作したオーナメントが輸出されており、これを店頭販売したのです。すると進駐軍だけではなく徐々に一般の日本人にも広まり、ほかに一般向けのクリスマスオーナメントを売る店がなかった時代、



クリスマスにはお客様で店がギュウギュウになるほどの人気商品に成長しました。バラックも店舗付き住宅に建て直し、きぬの弟・山田 智と保一の故郷から山本伶吉を社員に迎えました。保一と巖、それぞれに子供も 2 人生まれて、店にも活気が戻ってきました。1955 年(昭和 30 年)には「株式会社毛利マーク」と改組いたしました。

